

証券市場でさまざまな事件が起きて以来、学校教育でも金融経済教育のあり方がしばしば話題に上るようになってきた。子供たちはお金に対してどのようなイメージを持っているのだろうか？ 中学生に聞いてみた。

お金のイメージは？ きれいで汚い76%。お金を稼ぐことは？ 良いこと100%。悪いこと0%。どうしたら稼げる？ 人に喜ばれる88%。人を犠牲にする12%。

これは、金融経済の専門家の授業に参加した生徒の回答だが、どの学校でも似たような割合になるという。「お金のイメージは悪いが、稼ぐことは別」と判断軸が分れている。「このままの状態では社会に出たらどうなるだろうか？ 社会人として金銭を扱う責任を手にする前に、金融経済に関する見識を身につけておく」

解答乱麻

品川女子学院副校長 漆紫穂子



とは不可欠だろう。

経済のない一日はない。子供の買物鉛筆一本も経済とつながっている。お金のもの

「お金の力」を伝えよう

は社会生活を円滑にする道具として生まれたもので、本来きれいなものでも汚いものでもない。子供たちが将来の人生設計を考えると、それは夢をかなえる手段ともなる。

私の学校ではこのような観点からこれまでさまざまな切り口で金融経済の体験学習を行ってきた。習習ゲームでは

「うるし・しほ」東京都内の私立中教諭を経て、父が理事長を務める品川女子学院中高に移り、平成12年から副校長。大胆な改革で偏差値を20上昇させ入学希望者を60倍にした。

南北問題を憂慮し、株式学習では環境や弱者に優しい企業に投資する視点を身につけた。成果は広くシェアしよう。成果は広くシェアしよう。成果は広くシェアしよう。

「お金の力」を伝えることが、最近では取材を受けることである。成人し、選挙で投票する一票と同じくお金は投資する相手に力を与えるものである。将来、社会の一員としてお金の使い方に責任を持つためには、自分がどう生きたいかというビジョンを持つたいかという社会観を持つことが重要である。

大正三年、夏目漱石は学生

に向けた講演「私の個人主義」の中で「権力は義務を伴い、金力は責任を伴う。所有する富をどう使えばどう社会に影響が出るかを理解する見識をもちなければならぬ。人格のないものがむやみに使えば社会が腐敗する」と語っている。時代が変わっても学校教育の果たすべき役割は変わらないのである。

私の学校では現在、文化祭の模擬店を利用した起業体験を計画している。そこでは「利益をどう社会に還元するか」という視点を育てるため、「寄付」についても詳しく学ばせたい。

子供たちとお金について語ることをタブー視するのではなく、「お金の力」の活かし方を、人の生き方や理想の社会像とともに考えていく。それが学校での金融経済教育のあり方ではないだろうか。

教育

毎週月曜日掲載